

中長期目標	○未来に向かい 自分らしく輝き 豊かに生きる子どもの育成	今年度の 重点目標	○自己肯定感を高め、主体的に取り組む児童生徒の育成 ○質の高い職職員集団の実現 ○安全で安心な学校の実現 ○「チームくらよう」の推進
-------	------------------------------	--------------	---

年 度 当 初						評 価 結 果 (2)月		
評価項目	部	評価の具体項目	現状	目標(年度末の目指す姿)	目標達成のための方策	経過・達成状況	評価	次年度に向けた改善方策
自己肯定感を高め、主体的に取り組む児童生徒の育成	A 部門	○子どもたちが主体的に学習に取り組み、一人一人の方法で表現する力を育む授業づくり	○ルーティーンになっている流れで見通しを持って生活・学習することができている。 ○関わりの多い教職員だけでなく、普段、関わりの少ない支援者からの働きかけにも個々の方法で答えることのできる姿が増えてきているが、さらに「いつでも、どこでも、誰とでも」コミュニケーションをとることができるよう、それぞれの対応力、表現力を高めていく必要がある。	○様々な学習活動を通して、児童生徒が主体的に取り組み、一人一人の方法でいろいろな人に気持ちを伝えたり、表現したり、関わろうとしたりする姿が見られる。 ※教員の8割以上が「できた」と回答	○児童生徒が主体的に取り組む姿についての研修会を開催する。 ○児童生徒が主体的に取り組む姿とはどのような姿なのか、学部で共通理解し授業づくりに向かう。また、教職員間で効果的な授業づくりについての情報共有を行う。 ○関わりの多い指導者との関係性でできていることを、「いつでも、どこでも、誰とでも」できる力へとつなげていくことができる活動、有効な支援ツールや教材・教具等について情報共有する。	○研究部と連携して、児童生徒が主体的に取り組む姿についての研修会をし、今後、児童生徒と関わる上での知識・技術向上につながった。 ○POST事業、摂食指導等でご指導いただいたことだけでなく、個人で研修等に行って学んだこと等についても、A部門教職員に情報伝達することを意図的に設定することにより、教職員の学びが拡がり、深まり、児童生徒への支援へといかすことができた。 ○A部門教職員全員、「児童生徒が主体的に取り組むことができる授業づくり」ができた、「効果的な授業作りについての情報交換」ができたと回答した。また、ほとんどの教職員が「いつでも・どこでも・誰とでもできる力へとつながる活動・支援ツール・教材等について情報交換すること」ができたと回答した。教職員間で、学習の活動内容だけでなく、効果的な支援、教材教具等の情報交換を頻回に行うことで、児童生徒への関わり、支援にいかすことで、児童生徒たちが主体的に取組み、自分なりの方法で表現したり、自分の気持ちを伝えたりする姿が多く見られるようになった。	B	○今後も、研修の機会を設け、自己研鑽をつんでいきたい。 ○今後も、日々の授業について、また、支援方法や教材教具についての情報交換を重ねることで、教職員同志が学び、児童生徒たちが主体的に学習に取り組んだり、自分なりの方法で表現したり、自分の思いを伝えたりすることができる姿を今以上に引き出していきたい。
	B 小学部	○主体的に活動したり表現したりする姿へ繋げる指導・支援の工夫	○児童の達成感や主体的に活動する意欲・姿を育むため、教育活動全般を通して、様々なアセスメントからの児童の実態把握や情報共有を行い、発達段階に応じた表出や表現できる学びの場を作っていく必要がある。	○児童が学校生活場面の中で、自分で伝えたいことや表現したいことを、主体的に自分なりの方法で表出したり表現したりする姿が見られる。 ※教員の8割以上が「できた」と回答	①担任だけではなく、教員間でも児童の実態や目指す姿や、そこに向かう段階を共有(授業計画で、グループ会で、日常のコミュニケーションで、等)し、学習内容や指導・支援方法を検討して、評価・改善を行っていく。 ②児童の表出力や表現力を広げるために、有効な支援ツールや教材・教具の情報共有を図る。 ③児童、保護者のニーズをしっかりとキャッチすると同時に、学校生活での様子や学習の広がりについて、保護者や関係機関と共有し、連携を取っていくことを継続する。	【パーセンテージは「学部内アンケート」より】 ○目標(年度末の目指す姿) 「見られた」:78% 「どちらかというで見られた」:22% ○方策① 「できた」:39% 「どちらかというどできた」:55% 「あまりできなかった」:6% ・指導者間で、児童の様子や支援と検討、打ち合わせ、振り返りが密に出来た。児童の些細なことでも、主事や副主事に報告があった。児童への称賛等、児童の主体的なコミュニケーションを支援、応援する指導者間の情報交換を継続していく。 ○方策② 「できた」:28% 「どちらかというどできた」:56% 「あまりできなかった」:16% ・研究部との連携により、様々な支援やツールについて学びを深めることができた。ICT機器の活用については、文字を読む力や考えを伝える力が伸びたり、指導の引き出しを広げたりすることもできた。ICT機器活用場面以外でも、友達への声かけや相手に伝えるために言葉の例を示し、それを頼りに声かけをする姿があった。 ○方策③ 「できた」:22% 「どちらかというどできた」:72% 「あまりできなかった」:6% ・日々の様子を連絡帳や学級通信、懇談での動画視聴等により、児童の学習内容を伝えることができた。電話連絡で連携を図ることで信頼関係をさらに構築することもできた。保護者のニーズから、教育支援会議を実施し、関係機関や家庭とよりよい支援・対応について協議し、それぞれで実施できるケースが多くあった。	B	○チェックシートの活用など、指導内容を構成していく共通の基盤となるものの活用を再確認、検討していく。授業計画については、引き続き担任だけではなく、関係者と検討し支援方法について共有していく。 ○ICTの活用については、今後も実践事例を積み上げる必要がある。生きる力(主体的で対話的で深い深い学び)へのアプローチとして授業改善を図るには、課題解決学習などを取り上げ、協働的な学びと個別最適な学びに繋げていく。同時にアナログのよさ、本物のよさを活かした教材研究も意識するなど、それぞれの良さを引き出せる手法についての情報共有を行う。 ○引き続き、保護者の方のニーズをしっかりとキャッチする。必要があれば、早い段階で個別に懇談を実施するなど密にコンタクトを取ったり、問題行動のみではなくよい姿をしっかりと伝えたりする。役割分担を明確に提示し、報告・連絡・相談の流れを確認することで、さらに情報をキャッチして支援策を検討・共有していく。

様式 3	B 中学部	○表現力の育成を目指した授業の充実	○昨年度、伝え方や言葉遣い等に課題が見られ、生徒同士のトラブルにつながることもあったが、指導者が速やかに対応したことで、よりよい関わり方を知ったり改善しようという姿勢が見られるようになった。 ○新年度になり、教師や友だちとの関係や学習環境が変化したことにより、自分から気持ちが伝えにくい姿も見られる。	○相手を意識した伝え方を身につけ、自分の気持ちや思いを伝えることができる。 ※教職員アンケートで8割以上が「できた」と回答 ※生徒アンケートや学習の記録から評価	○身につけた力を様々な学習場面で活用できるように、学習活動全体を通して、自己表現やよりよい人間関係づくりを目指した活動内容の設定や共通した支援を行う。 ○安心して自分を表現することができるよう、生徒と指導者、生徒同士の関係づくりを行う。 ○生徒の実態把握や授業づくり、支援などのうまくいった事例や改善策などを、学習グループや学部内で情報共有する。	○様々な学習場面で、各担当が意識して言葉での振り返りや周りへの説明を行うなどしたことで、自発的に発言する生徒の姿も増えた。 ○表現力の向上に向けて研究で取り組んだ中で、生徒の実態把握、目標設定、目標達成のための学習内容の検討を行ったことで、自立活動での実態や目標別グループでの学習や、昼休憩に他クラスの友だちを誘って遊ぶ場面の設定など、生徒の実態に合った指導の充実が図れた。 職員アンケートの結果は、「できるようになった」12. 5%、だいたいできるようになった」68. 8%で、8割の教職員が生徒がい分の気持ちや思いを伝えることができるようになってきたと感じている。	A	○自分の思いを伝えることができる生徒は増えてきているが、相手を意識した伝え方には至っていないという反省も残った。対教師のやり取りや、教師主導のやり取りではなく、実態に合わせた、生徒同士が関わりあいを持てるような学習スタイルを考えたり、生徒が進んで考えたり、任せたりするような支援や場面設定をしたりするなどの工夫が必要と感じる。
	B 高等部	○周りの人とやりとりをする中で、自分の意思や、なぜそう考えたかを相手に伝えることができる生徒の育成	昨年度、ICT機器を利用した学びを通して、やりとりができる生徒の育成に取り組んだ。単一障がい学級の生徒においては、ICT機器を利用して、興味があることやわからないことを自分から進んで調べたり、自分の考えをまとめて相手に伝わるようにプレゼンを作成し、発表することができた。また、質問、意見など、周りの友だちとのやりとりが増えた。重複障がい学級の生徒においては、ビデオで自分の姿を観て、即時にふりかえることで、がんばったことや、次にがんばりたいことをより意識して、選択、発表することができた。	①周りの人とやりとりをする中で、自分の意思を相手に伝えることができる。 ②周りの人とやりとりをする中で、なぜそう考えたかのか、自分の考え方を相手に伝えることができる。 『意思、考え』→結論 『考え方』→結論に至るまでの過程(どう考えたか) アンケートを実施し、①②とも70%以上の指導者ができたと回答したらA、一つでも、できたが70%であればB、両方ともできたが70%以下であればC評価とする。	○昨年度取り組んだICT活用のよさを活かした授業の中で、指導者もしくは、生徒同士のやりとりを活発に行う。 ○まずは指導者が、生徒とのやりとりの中で、意思を聴いて終わりではなく、なぜそう思ったのか(なぜそう考えたのか)を生徒と問答するようにする。そして、生徒の考え方を整理し、○○だから(理由)、××の考えを選んだ(結論)と、話すことができるようにする。 ○キーノートなどのスライド作りやワークシートを利用して、考え方の過程を可視化しながら、ふりかえることができるようにする。	○【単一】①19. 2%(5月)→60%(9月)→80%(12月)②3. 8%(5月)→37. 5%(9月)→75%(12月)①②とも達成→評価A。前期は、指導者が生徒に意思を聞いたり、その理由を聞いたりすること自体に躊躇があった。夏休み中の研修や、9月以降の授業実践の取り組みを通して、指導者が、生徒の考えがまとまることを待ったり、質問の仕方を変えたりして、意思や考え方を上手に引き出す場面が増えた。また、生徒同士で話す機会が増え、意見がまとまってから指導者に伝えることなどもできるようになってきた。ただし、授業中や興味がある話題の中で意思や考え方を伝えることはできても、普段の会話等で自発的に意思や考え方を伝えるまでには至っていないため、継続して取り組む必要がある。 ○【重複】①19. 2%(5月)→60%(9月)→93. 3%(12月)②3. 8%(5月)→13. 3%(9月)→53. 3%(12月)①のみ達成→評価B。前期は、生徒が意思を伝えようとするまでに、指導者が待たずに話を進めたり、生徒の意思を代弁したりすることがあった。後期には、指導者のやりとりの仕方や問いかけの方法は変化したが、言語でのやりとりや、やりとり自体への難しさを感じる方も多くいた。生徒の実態に応じた表出方法や、指導者の受け止め方、個々に応じたやりとりのあり方など、複数人で確認しながら、生徒一人一人の表現方法について理解を進める必要がある。	B	○周りの人(指導者と生徒、もしくは、生徒同士)とのやりとりの中で、自分の意思や、なぜそう考えたか(その考え方)を相手に伝えることができる生徒の育成については、学部内の目標浸透度や、学校目標の重点項目である自己肯定感を高める取り組みに合致していると考えるため、継続する。 ただし、単一障がい学級と重複障がい学級の目標(評価)を分けて考える。 ○単一障がい学級生徒においては、生徒同士のやりとりを増やす取り組みを、また、重複障がい学級においては、自分なりの方法で意思を伝えただけではなく、伝わったことを感じることもできたかどうかについての取り組みをすすめる。 ○これらの取り組みを通して、卒業後の社会の中で、自己肯定感を高めながら生き抜く生徒の力を育成したい。

様式 3

年 度 当 初					評 価 結 果 (2)月				
評価項目	部	評価の具体項目	現状	目標(年度末の目指す姿)	目標達成のための方策	経過・達成状況	評価	次年度に向けた改善方策	
質の高い教職員集団の実現	研究部	○児童生徒が主体的・対話的になるような授業づくり	○授業公開を通して、表現力向上をめざした授業の工夫を知ることができた。他学部の授業を見る機会を得られたこと、良い点を知ること、伝えることができたことは、発表者にとっても参観者にとっても実りある研究となった。今年度は、良いところだけでなく、建設的なやりとりにより改善点等も話し合うことができるような授業公開としたい。	○授業づくりを通して、児童生徒の表現力を向上することができる。 ※教職員アンケートで8割以上が「できた」と回答	○授業者が実態・目標・授業の工夫がわかるシートを準備する。 ○授業者と参観者が授業について建設的に話し合うことができる「授業公開」となるような場を設定し、負担なく、いつもの授業をPDCAサイクルでできる土台となるものとすることを強調して教職員に伝える。	○学校自己評価のアンケートでは、「授業づくりを通して、児童生徒の表現力を向上することができる」という項目に対し「そう思う」「だいたいそう思う」の回答がほぼ100%となった。また、研究のまとめアンケートでも「主体的・対話的になる授業づくりを通して、児童生徒の表現力は向上したと思いますか？」に対して95%が向上したと回答し、目標は達成した。○今年度は、昨年度の反省をふまえ、全体授業公開の発表の時間をのばしたり、より積極的に建設的な話し合いの呼びかけを行い、良いところを見つけるだけでなく、建設的なやりとりによりアイデアや改善点等の活発な意見交換ができた。発表者にとっても参観者にとっても実りある研究となった。また、研究で終わるのではなく、いつもの授業で主体的対話的な授業づくりを意識して指導支援したり、児童生徒の表現力の向上が日常的に見られたりするなど、成果があった。	B	○今年度の授業公開と同様に、建設的なやりとりにより改善点等を話し合うことができるような授業公開としたい。研究で取り組んだことが、いつもの授業で役立つようにする。	
	教務部	○児童生徒の学習状況をより客観的に評価できる規準の作成 ○教育水準の維持向上と働き方改革を兼ねた諸帳簿の整理	○児童生徒の実態に応じた教育課程の編成が年次で行われている。 ○指導に際して、学習の立案は必要項目となっているが、評価への意識の定着が薄い。しかしながら多忙な毎日に評価までは手がつかないようにも感じている。 ○指導者が作成する諸帳簿に関して、学校のオリジナルのもので展開している。	○よりスリムな評価のシステムを構築を目指して、各教科の学習を評価する際の規準を校内で作成する。 ○新しい形の個別の指導計画への移行を年度内に行う。	○学習部の先生を中心にして、作業をすすめる。より同じ意識で作業に取りかかることができるように教務部として研修を企画・運営を行う。 ○他校の書式等を参考にしながら、国や県の動向を踏まえた書式かつ業務の削減につながるものに仕上げていく。	○教務部としての研修や資料・情報提供を行いながら先生方の日々の実践を学習指導要領とつなげる作業を行った。各教科の内容一覧や評価規準を活用して学習指導案を作成したり、参考にしたりしながら学習を組み立てる先生の姿があった。 ○実際の評価規準は、他校のものを参考に仕上げたので、作成という流れではないが、先生方の目に触れる機会を増やしたり、いつでもアクセスできるようにデータを保存したりすることで、意識できる環境を整えた。 ○学習指導要領について、各教科の内容等を確認しながら本校用の個別の指導計画の新書式を完成させた。	B	○来年度は諸計画スタートの年となるので、データや運用上の不具合等を想定し、教務部としての共通の見解を共有できる資料を作成したい。 ○よりスリムかつ、根拠のある評価システムを構築するにあたり、教科用図書や年間指導計画などの整備も同時に行うことで、学習指導要領を軸とした教育活動、諸計画を整備したい。	
	全体	○時間外業務の原因把握と業務カイゼンの推進	○個々の業務を見直し、継続的に業務量の平準化を図る必要がある。 ○前年度比で月45時間、年間360時間を超えて時間外勤務をする実態がある。	○日々勤務簿の自己管理を徹底するとともに、教職員アンケートに回答する形で自ら業務カイゼンに参画し、その具体的な改善策を具現化していく。 ※教職員アンケートで8割以上が目標達成のための方策を「できた」と回答	○会議をしない日やノー残業ディを設定し、早期退勤への意識を高めるとともに計画的に勤務をする環境を整え。勤務簿の自己管理の徹底を図る。 ○業務カイゼンに関する教職員アンケートを実施し、一人ひとりが業務カイゼンに向けての意欲を高めるとともに自ら考えた改善策を学校全体で具現化に取り組む。	○約9割の教職員のが日々勤務簿の自己管理を徹底するとともに、教職員アンケートに回答する形で自ら業務カイゼンに参画し、その具体的な改善策を具現化していると回答した。 ○夏季休業中の業務カイゼンに関する教職員アンケート結果より、一人ひとりが業務カイゼンに向けて自ら考えた改善策が実現されることで業務カイゼンに向けての職員の意欲を高めることができた。		B	○昨年度比で時間外勤務が減少しているが、月45時間、年間360時間を超えて時間外勤務を行っている実態があり、更に個々の業務を見直し、継続的に業務量の平準化を図る必要がある。
		事務部	○事務の効率化と「チーム事務室」の推進	○事務室内で協力し合いながら業務を行っているが、担当者以外が対応できないこともあり、不在の場合対応が遅れることがある。	○各自の業務がわかりやすく整理され、保護者や業者への対応、職員からの相談についての初期対応が担当者以外でもできる。	○各自が担当業務について改善できる点を見つけ実践する。担当者以外でも対応できるようDB等を使ってマニュアル化する。	○DBに各自で入力を行い、マニュアル化を進めている。	B	○DBを活用して、担当者以外でも保護者、業者への対応、職員の相談についての初期対応ができるようにする。

様式 3	健康教育部	○児童生徒の健康増進に向けた学習の充実と環境整備	○新型コロナウイルス感染症も5類に移行し、児童生徒の健康に関する課題も変化しつつある。コロナ過において給食指導やはみがき指導が不十分になり、歯肉炎の生徒が全校で約15パーセントいる。また、黙食の徹底により、給食中の指導もできず、食育も行き届いていない。さらには、保健体育の学習においてもマスクの着用、非接触等、制限のある学習が多く、運動の機会が減少している。	○歯肉炎の予防に向けてはみがき指導の充実が行われる。 ○肥満傾向の生徒は本県全体に比べて2～2.5倍であるが、減少傾向に向かっている。 ○性に関する指導や児童生徒の健康増進に向けた学習の教材が整理され、指導者一人一人が保健指導において「おおむねできた」と回答できた割合が8割を達成している。	○全国小学生はみがき大会の活用や、性に関する指導、日常生活の指導部、保健体育部等、複数の学習部と連携する。 ○児童生徒が歯磨きをすることの大切さを理解し、毎日の歯磨きを丁寧に行う。歯磨き指導や健康増進に向けた学習の充実を図れるように外部講師を活用する。	○歯肉炎等の治療勧告を保護者に行い、治療率が55.6%と昨年度に比べて約3%増えた。 ○高等部において、性に関する指導の充実を図るため、2学期に歯科医、歯科衛生士さんをお招きして講義、演習を行い、生徒だけでなく、歯科医、歯科衛生士さんにも好評をいただいた。 ○肥満傾向の生徒が昨年度に比べて小学部では10.6%、中学部では3.9%、高等部では2.8%減少した。 ○教職員の81.3%が性に関する指導の教材整理について「そう思う」「だいたいそう思う」と回答したが、「そう思わない」と回答したのが1.6%おられた。現状の整理の仕方を根本的に変えなければ、数値の変化は見られないと考えられる。	B	○学習教材の整理を現状よりさらに整理するためには根本的な変化が求められると考える。先生方がどのような整理を望んでいるのか把握することも大切であると考え。 ○歯肉炎の予防に向けて歯磨き指導がより充実したものになるよう、今後も外部講師を活用や全国小学生はみがき大会等の取り組みを行っていく。また肥満傾向の児童生徒が減少傾向になるよう、学校での取り組みだけでなく、保護者とも連携を密に取っていく。
	安全で安心な学校の実現	○安全・安心への意識と体制作り	○各種訓練、研修会、ヒヤリハット等を通して、教職員の安全で安心な環境づくりに対する意識を高めるよう努めている。 ○地震、火事、不審者などの避難訓練の方法や緊急時に使用する機器の扱い等に課題が上がっている。	○児童生徒が安全・安心な環境で学習できるよう避難訓練や安全点検、ヒヤリハットでの情報共有、課題への対応を適切に行っている。	○安全点検を適切に行い、事務部への報告を行う。 ○安全・安心への意識を高める体制作りを行うことができるように、避難訓練の方法などを検討・見直しをしながら計画、実施する。	○火災、地震の避難訓練では、災害で実際に起こりうる状況を想定し、放送機器が使えないという設定で行った。共通理解事項を周知し、迅速に避難することができた。また、煙体験、水消火器体験を行い、児童生徒が体験する機会を作ることができた。 ○毎月安全点検を行い、不備のある箇所について報告し、事務部と連携しながら修理や改善をしている。学部によっては、実態に合わせて、重点的に点検する部分を設定し、安全安心な環境整備に努めた。 ○ヒヤリハット事例について、教職員で共有し、留意点を共通理解することができた。 ○教職員の95.3%が、安全・安心な環境づくりを適切に行っていると回答している。	A	○避難訓練や研修について、実施後の職員アンケートの意見をもとに、訓練の方法や課題点など、見直しを行った上で次年度へ引き継ぐ。 ○安全点検表を、項目ごとに点検できる様式に変更し、点検を行う際の視点や点検方法を分かりやすくすることで、事故防止に努める。 ○ヒヤリハット事例の共有を継続する。重大事案がある際は職朝で確認し、共通理解する。
	安全・環境部	○より安全・安心な教育環境	○定期的な掃除道具点検、職員作業により、校舎内外の校内外の環境が整った。 ○TEAS報告やエコ点検を定期的に行っているが、エコについての取り組みがクラスによって差がある。特に、水道、紙の使用量が増えている。点検内容を見直したので、結果を見て呼びかけを行っている。	○安全・安心な教育環境づくりを行うとともに、エコに対する意識が高まる。 ※職員作業の実施(年2回) ※掃除道具点検の実施(年2回) ※水道・電気の使用量で、昨年度との比較を周知する。 ※エコ点検で◎の割合が6割以上	○年に2回の職員作業を計画実施し、安全安心で無駄のない環境づくりを行う。 ○委員会・分掌と連携し、環境に関する啓発をしていく。 ○電気、水の使用に関してエコにつながる具体的な取り組みを示すとともに、掲示板上にTEAS報告を載せ、全校への意識づけを行ったり、職員への協力を呼びかけたりする。	○職員作業を夏冬2回実施した。各分掌・学部・部門で内容や日時を決めて行った。全職員が一斉に行ってはいないが、各分掌・学部各々で適切に実施され、校内各所概ね整えられている。 ○飼育委員会で、野菜くず等をうさぎの餌にしたり、エコ美化委員会でエコ点検の呼びかけやエコボックスの利用推進をしたりするなど、委員会と連携しながらTEASの取り組みを行った。 ○年度初めと、冬季休業に掃除道具の点検の声かけをし、破損したものの交換や、使用していない道具の確認を行った。おおむね、在庫管理が適切に行えている。 ○エコ点検は実施できている。クラスの実態はさまざまであるが、6割以上の◎がついた学級が多かった。 ○電気、水の使用量について、掲示板上に載せ、職員に周知し、協力を呼びかけることができた。	B	○環境整備職員作業は、天候や業務改善により、一斉に行うことが難しい場合もある。日頃から管理責任者が中心となり、整理整頓や適切な管理を心がけていく。 ○環境についての啓発に関しては、呼びかけは行ったが、掲示物製作や活動紹介を行うことなどはできていなかったもので、委員会と連携し、掲示等を活用しての周知や意識づけを行う。 ○電気、水の使用について、職員に周知する頻度を学期に1度程度に増やし、意識づけやエコの取り組みへの協力につなげる。

様式 3

年 度 当 初						評 価 結 果 (2)月		
評価項目	部	評価の具体項目	現状	目標(年度末の目指す姿)	目標達成のための方策	経過・達成状況	評価	次年度に向けた改善方策
「チームくらよう」の推進	情報教育部	○本校教育についての理解啓発につながり、指導支援の連携を密にしていくための教育活動の発信 ○児童生徒の端末の活用促進 ○ICTを活用した効率的な業務改善	○定期的に学校ホームページで教育活動について発信しより分かりやすいものとなってきたが、効率的な利用ができていない。 ○指導者用端末や児童生徒の1人1台端末整備の遅れがあるためICT活用による学習活動が十分に実施できていない。 ○ペーパーレス化が徐々に進んできたが、教職員のICTリテラシーの差があったり、トラブルへの対処などの問題があったりする。	○学校ホームページによる情報発信の充実を図るとともに、必要な書類がダウンロードできるようにするなど利便性を高める。 ○児童生徒の1人1台端末を活用とともにペーパー教材の他にデジタル教材を取り入れ、学校と家庭の連続的な学びができるよう効果的なICT活用の充実を段階的に図る。 ○教職員のフォローアップ研修や個別支援を継続しながら、学校全体としてICT活用による効率的な業務改善を図る。	○くらようダイアリーの定期的な更新をする。また、学校ホームページの内容やデザインレイアウト等リニューアルを行う。 ○ICT活用を効果的に生かした授業ができるよう研修を通してデジタル教材やその活用方法についての実践事例の紹介を行う。 ○ICT活用の教職員研修や個別のフォローアップやともに1人1台端末の利用の日常化に取り組む。各分掌業務の中でアンケートを実施する場合はグーグルフォームで行うよう呼びかけるなど啓発を行う。	○くらようダイアリーの定期的な更新をすることができた。学校ホームページの内容については6月に、デザインレイアウト等リニューアルについては夏季休業中にほぼ更新ができた。 ○情報教育部やICT支援員によるICT研修におけるアプリとその活用事例の紹介等を通じ、授業でのICT活用が促進され効果的な学習が進展してきている。しかし、1人1台端末の整備が十分ではないことや教員のICTを活用した実践が限られているため、児童生徒が端末を活用した効果的な授業に結びついていない。 ○指導者用端末の整備が進んできており、グーグルドライブ等クラウドを使用して学部会や学部研究をはじめ、校務でのICT活用が日常化してきた。アンケートについても、QRコードからグーグルフォームで回答するなどデジタル化によって集計や分析等の効率化が進んだ。	B	○くらようダイアリーは引き続き定期的な更新をするとともに、閲覧した方に満足していただけるコンテンツに質的にも向上できるよう検討する。 ○学習用端末や指導者用端末の整備も進み指導者がより効果的な学習指導ができるよう引き続き研修や個別相談を行っていく。また「すらら」や「Loiloノート」などのツールを活かしながら学習者用として協働的な学びと個別最適な学びの実現を図る。また、連続的な学びができるよう端末の持ち帰りを検討する。 ○今後も校務用パソコンおよび指導者用端末を活用してペーパーレス化とクラウド活用を図り、より一層の校務のDX化推進を図る。
	支援部（校内）	○適切な就学支援に向けた校内体制の充実	○児童生徒の実態の多種多様な変化等に加え、総合的な視点で検討される就学支援の考え方により、児童生徒にとって適切な学びの場の検討をすることが複雑化してきている。就学に関して、職員全体で共通理解をしたり校内体制を整えたりしていく必要がある。	○就学に関する判断基準を再度全職員で共通理解をし、一貫した視点で実態把握や検討を行う。 ※職員会、学部会、校内就学支援委員会において、判断基準(学校教育法施行令第22条の3、辻村報告、障害のある子どもの教育支援の手引き)を周知する。	○まずは、担当者を中心に支援部内で就学に関する情報を収集したり共通理解を図ったりする。 ○職員会や就学支援委員会、学部会等を活用し、就学に関する情報を校内で周知する。 ○校内就学支援委員会や体験入学・体験学習等で、就学支援の視点が生かされているかどうか、PDCAサイクルで確認する。	○年度途中までの取り組み状況を踏まえて、就学支援、手続きの流れを改めてスケジュール化し、職員全体で周知を行った。就学担当と連携しながら取り組みつつも、個々の職員もスケジュールを見て見通しを持ちながら準備を進めていけるようにした。 ○就学に関する判断基準について、これまでの基準を再度確認するとともに、他校の状況についても情報収集を行った。各校の体制や資料等を参考にし、校内体制の整備を進めている。	A	○今年度同様に、職員会や学部会での周知、資料提示等により、早い段階から全職員での共通理解を図っていくことで、就学についてスムーズな流れを促していく。 ○職員への周知や共通理解を行う際には、各学部の支援部員の役割を明確にすることで、支援部員を中心により具体的に学部内での話し合いが行われるようにしていく。
	支援部（地域）	○教育相談の充実による適切な就学支援の促進	○センター的機能の活用により、就学に関する情報を園や学校に提供したり、幼児児童生徒への指導・支援について相談業務に対応したりした。今後も継続して活動し特別支援教育の充実を図ることで、学びの場の選択肢が広がっていくようにしたい。	○教育相談や体験入学・体験学習等で、園や学校、保護者の方に就学や指導・支援に関する情報提供等を行う。 ※体験、学校説明会、研修会等のアンケートで「参考になった」「」の回答が8割 ※1件の教育相談について、2回以上継続して相談対応を行う。(総件数の8割)	○それぞれの学びの場のメリット・デメリットを整理して伝えることで、園や学校、保護者の方の検討材料になるようにする。 ○教育的ニーズを把握し、実践につながりやすいように、具体例を挙げながら指導・支援方法について伝える。 ○コーディネーターを中心に、支援部や校内資源を活用しながら、教育相談に対応する。	○教育相談の際には、コーディネーターに加え、高校支援担当や校内支援担当、学部の職員と協力して対応するようにした。それぞれが役割分担をして進めていくことで、ニーズに沿ってより具体的な情報提供や助言等を行うことができ、学びの場の検討にも活用してもらうことができた。 ○学校説明会、研修会でアンケートを実施した結果、「参考になった」などの回答が8割以上あった。体験学習等でも参加者より「実際に体験できて良かった」という意見を多数聞くことができた。教育相談では、相談回数も増え、8割以上の学校で継続して対応した。	A	○現在就学についての説明等はコーディネーターを中心に行っている。今後は管理職にも協力を仰ぎながら、学校として情報提供を行う場面も検討していきたい。 ○教育相談の際には、通学担当との連携も視野に入れ、よりニーズに沿った話し合いができるようにする。
	キャリア教育部	○保護者への情報発信	○集合型の中部福祉セミナーを5年ぶりに開催できるように準備を進めている。また、先輩保護者から直接話を聞く座談会式研修会の準備を進めている。人権教育・交流や進路に関する保護者への情報提供の充実をさらに図る必要がある。	○保護者アンケートで5割以上が「研修会やセミナーに参加したり、キャリア教育だより等を読んだりして、進路や人権教育・交流に関する情報を得ることができた。」と回答する。	○中部福祉セミナーの開催 ○先輩保護者に学ぶ会(座談会)の開催 ○保護者対象視察研修の実施 ○保護者対象人権教育研修会の開催 ○キャリア教育だよりの発行	○中部福祉セミナー、先輩保護者に学ぶ会、保護者対象視察研修、保護者対象人権教育研修会とも計画通り実施した。 ○キャリア教育だよりを月1回程度発行し、啓発に務めた。 ○保護者アンケートより、「キャリア教育だよりの内容は、将来の生活や人権・交流活動を考えるにあたり、参考になる。」の質問に対して90.3%が「そう思う」「だいたいそう思う」と回答。	A	○今後もそれぞれの事業を開催し、それをキャリア教育だよりとして発行し啓発を図っていくと共に、参加者が増えるように担任からの呼びかけを強化するなど開催の工夫を行う。

評価基準 A: 十分達成 B: 概ね達成 C: 変化の兆し D: まだ不十分 E: 目標・方策の見直し

〔100%〕

〔80%程度〕

〔60%程度〕

〔40%程度〕

〔30%以下〕